

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 29 日現在

機関番号：31310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380895

研究課題名(和文) 自伝的記憶の想起の偏りを通してみた自閉症スペクトラム児の社会性の障害に関する研究

研究課題名(英文) The relationships between autobiographical memories and social dysfunctions in children with autistic spectrum disorders

研究代表者

平野 幹雄(Hirano, Mikio)

東北化学園大学・医療福祉学部・教授

研究者番号：20364432

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、学齢期の自閉症スペクトラム児を対象として、自伝的記憶の想起と社会性の障害との関係性について検討した。その結果、知的障害のある自閉症スペクトラム児は、自閉症スペクトラムを伴わない知的障害児と比較して、感情に関する単語よりも時代区分に関する単語を提示された際に特定の出来事を想起する傾向にあった。また、自閉症スペクトラム児は自己の行為とその結果の因果関係の理解が困難であった。自伝的記憶と心の理論との関連について、ポジティブな単語を提示した際、心の理論を通過した対象児において特定の出来事が想起された数は、通過しなかった対象児において想起された特定の出来事の数に有意に上回っていた。

研究成果の概要(英文)：In this study, the authors studied the relationships between autobiographical memories and social dysfunctions in children with autistic spectrum disorders(ASD). Children with both intellectual disability and ASD had a tendency to recall specific autobiographical memories in lifetime periods conditions rather than emotional words conditions. They also had a problem to understand relationships between their own actions and those effects. Regarding the relationships between the autobiographical memory and theory of mind, children who passed the theory of mind had a tendency to recall specific autobiographical memories in emotional words conditions.

研究分野：障害児心理学

キーワード：自閉症スペクトラム 自伝的記憶 社会性の障害 心の理論

1. 研究開始当初の背景

筆者らは、学童期の自閉症スペクトラム児を対象とした放課後支援を通じて、彼らの社会性の問題について支援を行ってきた(平野ら, 2010)。そうした中で、彼らにおいて過去に経験した出来事のうち、他者の行為は想起可能であっても自己に関する内容を想起できない場面が度々見られ、そうした現象が他者との間でトラブルになる契機を理解できない要因になっていた。実際、知的機能の高い自閉症スペクトラム児の中核的な問題は社会性の障害であるとされ、その要因として、他者理解に問題があるとの観点から心の理論障害仮説が提唱されている(Baron-Cohen, 1995)。サリーとアン課題に代表される誤信念課題があり、自閉症スペクトラム児は困難を示すことが知られている。しかしながら、近年では、彼らの中にはある年齢に達すると通過可能である子どもが一定程度いることが明らかにされている(別府, 2011)。

ところで、上述した記憶は自伝的記憶、つまり「個人が過去に直接経験した出来事に関する記憶」と呼ばれている。記憶に何らかの困難を伴う障害児・者は、主に新たな情報の獲得あるいは保持が困難であり、その結果として既存の尺度では測り得ない実生活上の困難が生じる。申請者は、上記の困難の解明を目的として、自伝的記憶を取り上げて主に脳損傷児者を対象とした研究をおこなってきた。その結果、特定の自伝的出来事の記憶(よりエピソード記憶的な記憶)と総括的な自伝的出来事(繰り返し経験した出来事)の記憶とが乖離する可能性があること、仮に特定の自伝的出来事の想起が可能であっても「自分が想起した出来事を実際に経験した」という主観的な意識が欠落すること等を明らかにしてきた(Hirano & Noguchi, 1998; Hirano, Noguchi, & Hosokawa, 1999; Hirano, Noguchi, Hosokawa, & Takayama, 2002)。自伝的記憶は問題解決やプランニング、意思決定などに活かされている(Hodges & McCarthy, 1995)。そもそも社会性は、自己と他者との関係性の中で獲得されて育まれることを合わせて鑑みると、上述したような彼らにおける自伝的記憶の特徴と社会性の障害との間は複雑に関係しあっており、その過程の中で他者とのトラブルが生じている可能性がある。正しい社会性を知識としては有しているものの、実生活上では社会性に困難を有している事例も存在する(Damasio, 1994)。それゆえ、実験的な課題を通じた検討のみでは不十分であり、現実世界で発揮される社会性にも注目して検討を進める必要がある。

以上より、自閉症スペクトラム児の社会性の問題について新たな支援方略の構築するためには、自伝的記憶の想起の偏りについて、取り上げた上で、社会性の障害との関係性について考察することが必要である。またその際、社会性の問題について実験的に検証する

だけでなく、実生活上の問題としても分析の対象として取り上げることにより、自閉症スペクトラム児を対象とした社会性の支援のあり方について新たな視座が得られるものと考えられた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、学齢期の自閉症スペクトラム児を対象として、心の理論課題を用いた検討に加え実生活上において観察される社会性困難に関するチェックリスト等を作成実施することを通じて社会性の障害について検討すること、彼らの自伝的記憶の想起の偏りの有無について分析検討すること、自伝的記憶の想起の偏りの有無と社会性の障害との関係性について考察した上で、自閉症スペクトラム児を対象とした社会性の支援方略を構築することの三点であった。

3. 研究の方法

対象者

および について

知的障害のある自閉症児 8 名(平均年齢 15.6 歳)、および知的障害児 7 名(平均年齢 17.0 歳)、合計 15 名(16.5 歳)であった。レヴン色彩マトリクス検査を実施したところ、両者の知的機能に有意な差は生じていなかった。

について

知的障害のある自閉症スペクトラム児 19 名(平均年齢 16.8 歳)と知的障害児 26 名(平均年齢 15.9 歳)、合計 45 名(平均年齢 16.2 歳)を対象とした。レヴン色彩マトリクス検査を実施したところ、自閉症スペクトラム児の方において有意に IQ が高かった($p < 0.05$)。

課題及び手続き

社会性の課題

社会的相互作用場面で見られる「自己の行為とその結果の因果関係の理解の困難」に焦点を当て、彼らの特性を明らかにした。行為者(自己および他者)によって因果関係の理解に違いがあるのかを検証するためにさくろく課題を用いた。

自伝的記憶課題

感情に関する単語及び時代区分に関するテーマ(小学校時代、中学校時代等)、合計 14 個を口頭で順に示して、各々に関して自分の経験した特定の出来事を想起するように指示した。想起された出来事は、それぞれの内容に基づいて特定の出来事を想起できたか否か(以下、特定性と記す)、いつ、どこで、だれが、どうしたといった情報が含まれていたかどうか分析した。想起内容に他者が含まれていたか、感情の想起があったかど

うかも同時に分析した。

倫理的配慮

筆者の所属先の倫理委員会の承認を得ると同時に、対象者の保護者および所属している学校に対して実施内容について説明と同意を得た上で、また対象者本人にアセントをおこなった上で課題を実施した。

4. 研究成果

自閉症スペクトラム児における社会性の困難について

知的障害のある自閉症スペクトラム児は行為者が自己であっても他者であっても因果関係の理解に違いは見られなかった。一方で、知的障害児は自己が行為者となる場合の因果関係の理解に困難を示す傾向がみられた。これらより、知的機能の制限があっても、自己の行為とその結果の因果関係の理解が困難であるという自閉症スペクトラムの特性が確認された。加えて、すくなく課題においては、因果関係の生じた場面に関する質問(結果理由質問)において、自由回答を求めたのちに複数の選択肢を与えて回答を求めた。筆者らが以前おこなった高機能自閉症児を対象とした調査(鈴木ら, 2014)では、前者よりも後者の成績の方が良好であったが、知的障害のある自閉症スペクトラム児の場合、後者の成績の方が低かった。口頭での回答が難しい場合に選択肢を与えて回答を促すことを意図した課題であったが、知的障害のある自閉症スペクトラム児の場合は、選択肢が複数提示されることで情報過多となってしまう、回答に迷いが生じて成績が低くなってしまいう可能性が考えられた。

自閉症スペクトラム児における自伝的記憶の想起の偏りについて

想起された全ての情報の特定性、いつ、どこで、だれが、どうした、他者が含まれていたか、感情が含まれていたかについて、対象群間で有意な偏りは見られなかった。一方で、感情に関する単語と時代区分に関するテーマとに分けて分析したところ、特定性に関して、知的障害児は感情に関する単語に対する想起において特定の出来事を想起する傾向にあった。一方、知的障害のある自閉症スペクトラム児は時代区分に関するテーマに関して特定の出来事を想起する傾向にあり、2 検定をおこなった結果、それらの偏りは有意であった($p < 0.05$)。これらは、知的障害児と、知的障害を伴う自閉症スペクトラム児との間で自伝的記憶にアクセスしやすい手がかりが異なっている可能性を示唆するものと考えられた。なお、その他の項目については有意な偏りは見られなかった。

自伝的記憶の想起の偏りの有無と社会性の障害との関係性について

対象群間において、想起された出来事の上記の項目と自閉症状の有無との間に有意な関連性は見られなかった。一方、想起された出来事と心の理論課題の通過の有無については、ポジティブな単語に関する出来事との想起を行った際に、心の理論課題を通過した対象児において特定の出来事が想起された数は、心の理論課題を通過しなかった対象児において想起された特定の出来事の数に有意に上回っていた($p < 0.05$)。なお、その他の項目と心の理論課題との間には有意な関連性はなかった。心の理論は自他理解と密接に関連していると考えられている。そうした自他理解と自伝的記憶の想起内容の詳細さとが関連している可能性は、自伝的記憶が「自らの経験した出来事に関する記憶」であることから十分にあり得ることと思われる。一方で、ポジティブな単語や時代区分に関するテーマを提示した際にはそうした有意差は見られなかったことから、どのような手がかりを提示した際に想起される出来事の詳細さが変化するかについては今後の課題としたい。

文献

- 1) Baron-Cohen, S. (1995). *Mindblindness: An essay on autism and theory of mind*. 長野敬・長畑正道・今野義孝訳(2002). 自閉症とマインド・ブラインドネス. 青土社.
- 2) 別府 哲(2011). 自閉症児者の社会性に関する発達研究の最前線. *臨床発達心理実践研究*, 6, 5-10.
- 3) Damasio, A. (1994). *Descartes' Error: Emotion, Reason, and the Human Brain*. 田中三彦訳(2010). デカルトの誤り 情動、理性、人間の脳. ちくま学芸文庫.
- 4) Hirano, M. & Noguchi, K. (1998). Dissociation between specific personal episodes and other aspects of remote memory in a patient with hippocampal amnesia. *Perceptual and Motor Skills*, 87, 99-107.
- 5) Hirano, M., Noguchi, K., & Hosokawa, T. (1999). Autobiographical recollection and affects of cues in an amnesic patient. *Psychological Reports*, 85, 1113-1117.
- 6) Hirano, M., Noguchi, K., Hosokawa, T. & Takayama T. (2002). I cannot remember, but I know my past events: remembering and knowing in a patient with amnesic syndrome. *Journal of Clinical and Experimental Neuropsychology*, 24(4), 548-555.
- 7) 平野幹雄・鈴木徹・野口和人(2010). 高機能自閉症およびアスペルガー症候群の子どもへの社会性発達支援の試み. 宮城教育大学特別支援教育総合研究センター紀要, 5, 22-30.
- 8) Hodges, J.R. & McCarthy, R.A. (1995). Loss of remote memory: a cognitive

neuropsychological perspective. Current Opinions in Neurobiology, 5(2), 178-183.

9) 鈴木徹・平野幹雄・野口和人・細川 徹 (2014). 高機能自閉症者における自己および他者の行為とその結果の因果関係の理解. 発達障害学研究, 36, 293-302.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 5 件)

- 1) 平野幹雄：自閉症スペクトラム児を対象とした社会性発達を促す実践的な取り組み(自主シンポジウム:特別支援教育におけるロマンティック・サイエンス 5). 日本特殊教育学会第 52 回大会話題提供. 2014 年 9 月, 高知大学.
- 2) 平野幹雄：発達障害にかかわる家族と地域支援:発達心理学の立場から. 日本家族心理学会第 32 回大会(招待講演).
- 3) 鈴木徹・佐々木健太郎・平野幹雄：知的障害のある自閉症スペクトラム障害児の自他の行為と結果の因果関係の理解. 日本特殊教育学会第 54 回大会, 新潟大学.
- 4) 平野幹雄：マイケル・コールとロマンティックサイエンスー認知や社会性の発達を文脈の中でどのように捉えるのか(自主シンポジウム:特別支援教育におけるロマンティック・サイエンス 6) 日本特殊教育学会第 54 回大会, 新潟大学.
- 5) 鈴木徹・平野幹雄：自閉症スペクトラム障害児における自己/他者理解の程度と社会的相互作用場面に関連に関する検討. 日本発達障害学会第 52 回大会. 群馬県社会福祉総合センター.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

平野 幹雄 (HIRANO, Mikio)
東北文化学園大学医療福祉学部
保健福祉学科 教授
研究者番号：20364432

(2)

研究協力者

鈴木 徹 (SUZUKI, Toru)